

# 碧水寮命名や寮歌（波濤砕くる）作成の経緯

松浦 莊一郎（47期・漁業科）  
（大阪府在住）

## 1. 昭和44年頃の学校の状況

- （1）水産業・海運業ともに好況により入学希望者が多く、各クラス定員一杯でした。
- （2）各学年ともに、島後出身者が半数弱、島前と島外の生徒がそれぞれ1/4ほどずつの構成だったように思います。

## 2. 当時の旧寮（宮田寮：くんだりょう）の状況

- （1）旧寮の建築年は不明ですが、相当古く、廊下を走ると床が抜けるような状態で食堂、風呂なども非常に狭いものでした。
- （2）寮生総数は150名～160名もおり、島後（五箇など）出身者が入寮を希望しても入れない状況でした。
- （3）昭和43年当時、宮田寮の部屋総数は11室で、各室とも10畳ほどの畳敷きと8畳ほどの板間があり、板の間に各自の個別机を設置、その狭い部屋に15名ほどが居住  
～今では信じられませんが、10畳ほどの畳の上に9～10人分の布団を敷き、布団を出したあとの押し入れと、その上の物置場（約1畳）にも布団を敷き上級生の特別個室として使用～
- （4）旧寮は昔からのしきたりが多く、一年生はデッキ擦りの要領で雑巾により同じ箇所を何百回も擦り、トイレ掃除は船乗りの初歩として素手で便器を洗い、コンクリートの床はデッキブラシで何百回も洗いました。そのお陰で船乗りになってからもデッキブラシの使い方は上手いと褒められたものです。
- （5）風呂焚きは一年生の当番制で、薪にするために海岸へ流れ着いた流木や近くの山へ朽ち木など拾いに行ったことを懐かしく思い出しております。

## 3. 新寮竣工

- （1）昭和44年秋に新寮の半分（東側の建物）が竣工した時には「誰から新寮に入るか」で相当話題になりましたが、3年生が優先されたように思います。  
（1室6名定員～3年1名、2年2名、1年3名が原則）
- （2）残り半分（西側）の竣工年月日は明確に覚えていませんが昭和45年の春から食堂、調理場、風呂などを含め全面オープンしたように思います。
- （3）新寮は新建材などを使っているため、過度の大掃除には耐えないようで、大掃除は次第に無くなりました。
- （4）新寮になってから、当時の舎監長・前田善三郎校長先生をはじめとした舎監の先生方の強い指導があり、当時寮長であった私も微力ながら努力し寮生活は次第に改善されていったと思います。

#### 4. 新寮～寮名・寮歌募集

- (1) 昭和44年だったかと思いますが「新しい寮名・寮歌を作ろう」とのことになり募集しました。
- (2) 舎監の先生と、寮生代表同数の選定会が開かれ次のように決まった次第です。

寮名：碧水寮（へきすいりょう）

命名者：金坂満政さん（47期・漁業科）

#### (3) 寮歌

波濤砕くる（第二寮歌）

作詞者：松浦 莊一郎

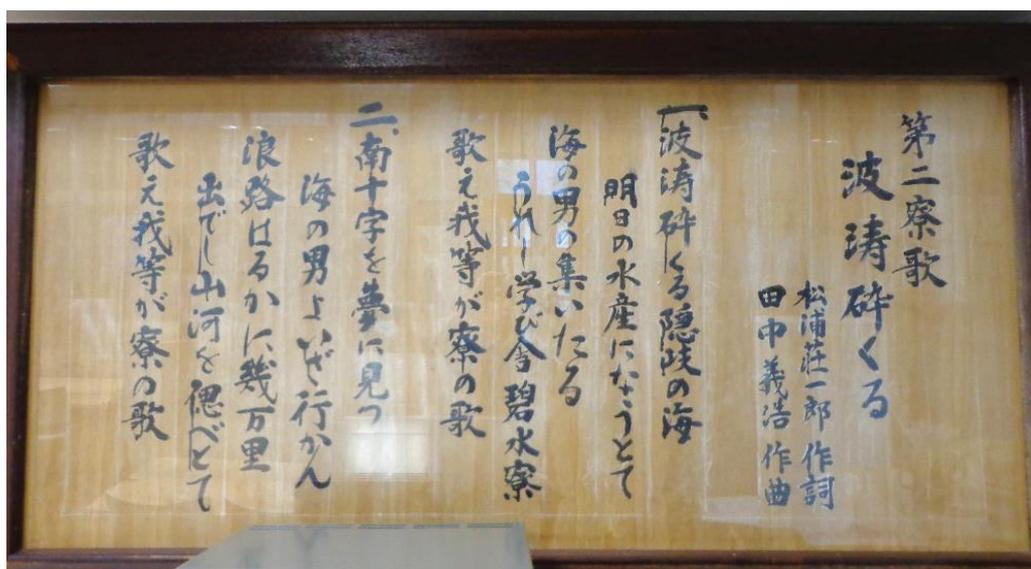
当時は、「波濤砕くる」や「第二寮歌」の区分けは無かったように思いますが、後輩諸氏が命名してくれたようです。

#### (4) 寮歌作曲の経緯

当時の水産には音楽の授業がなく、舎監長前田善三郎先生の発案で数年前まで隠岐高校で音楽の先生として勤務され、当時は島大附属小か同中学校の音楽の先生であった田中義浩先生に依頼した次第です。

多感な青年期に「同じ釜の飯を食い、ともに苦労した寮の仲間」は、今でも良き友人であり、会えば五十年前の昔話で呑み、笑い、時には涙しているところです。同期会は最高の会合であり、コロナ収束後の再会を待ち望んでいるところです。

末筆ながら、母校隠岐水産高等学校の隆盛を祈っております。



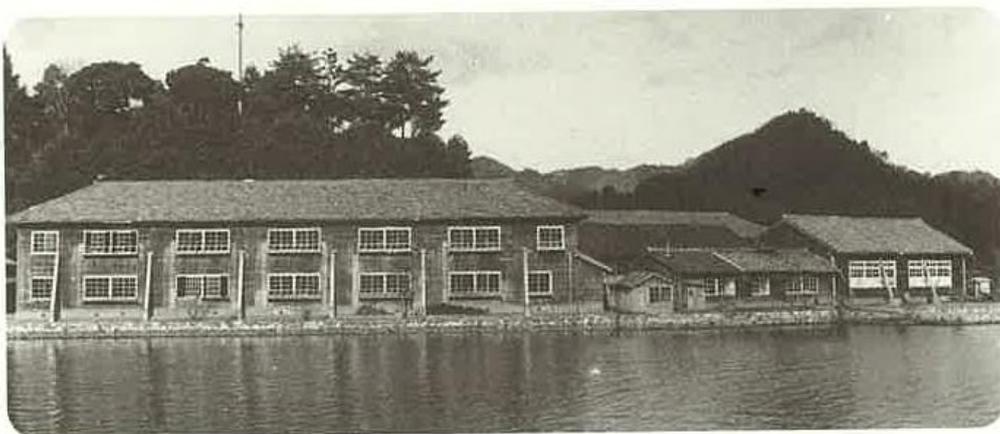
現碧水寮の食堂に掲げてある第二寮歌



作詞した当時の松浦氏



松浦莊一郎作詞を指すのは  
同級生の村上龍二本校講師



宮田寮(大正 11 年～昭和 43 年)



碧水寮(昭和 43 年～平成 15 年)